

困難な問題を抱える若年女性支援のためのセミナー

令和4年2月8日（火）近畿・中国・四国ブロック <オンライン開催>

【事例紹介講演 1】

生きづらさ、抱える女性たち
- 制度のはざまに埋もれたSOS-
<地域編>

特定非営利活動法人BONDプロジェクト



BONDプロジェクトに届いた直近の相談件数 (2021年1月～12月) (件)

	LINE	メール	電話	面談	保護	同行支援	他機関連携
1月	1,853	836	131	105	64	6	13
2月	1,552	805	108	132	85	9	10
3月	1,074	995	140	151	102	6	7
4月	1,208	896	141	126	89	8	28
5月	1,598	1,038	174	132	102	5	24
6月	1,328	834	175	142	116	8	51
7月	1,304	918	156	151	141	5	54
8月	1,554	988	184	166	122	5	64
9月	1,593	779	158	154	124	3	49
10月	1,984	798	150	139	103	1	13
11月	2,061	811	161	152	106	2	36
12月	2,400	900	151	136	95	4	13
合計	19,509	10,598	1,829	1,686	1,249	62	362

全国から届く相談に対応するため出張面談、同行支援を行ってきた



出張面談、同行支援をなぜ行うのか？

特に緊急度の高い場合（家出している、生活困窮している、孤立した子育てをしている、妊娠している、性被害にあっている、住む場所がないなど）は迅速に出張面談を行い、必要な支援に繋ぐ。
相談者1人では相談窓口で話せないケース（行政への相談に敷居を高く感じている、自分の状況や考えを上手く言語化できない、混乱している、精神面を含めた体調不良の症状が出ているなど）については窓口と同行する。支援を受けることに不安を抱えている場合もあり、背中を押す役割にもなっている。



対面相談がなぜ必要なのか？

文字のやり取りだけではわからないことがある。雰囲気、話し方や声の調子、体調、衛生状態、家出している場合は荷物の量や服装、地方へのお出張面談の場合は暮らしている環境など会ったことがあり、なぜ相談や支援からこぼれ落ちてしまったのか、どのような支援を必要としているかがわかることもある。
また、コロナの影響で人との関わりが薄くなり、行ける場所が減っていることなども孤独や孤立を深めることに繋がっており、コロナ禍のような有事の時だからこそ対面相談が必要となっている。

【都道府県別】BONDプロジェクトに届いたLINE相談件数(2021年1月～12月) (件)

北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉
788	81	153	207	98	100	242	255	294	199	942	991
東京	神奈川	新潟	富山	石川	福井	山梨	長野	岐阜	静岡	愛知	三重
2,082	1,653	141	120	112	135	60	413	163	769	1167	265
滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良	和歌山	鳥取	島根	岡山	広島	山口	徳島
417	560	1228	690	89	31	45	82	200	465	385	74
香川	愛媛	高知	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	不明
111	77	511	494	96	82	108	141	68	231	68	1,661

困難を抱える若年女性がコロナの影響もあり、全国的に増えている。

コロナの影響を受けて・・・
度重なる緊急事態宣言等により出張面談、地方での同行支援に規制がかかり、連携先が必要となっている。

- どんな相談が増えているか？
- ・コロナによって生活スタイルや家族関係が変化したことについての相談。
「コロナのせいで」などの言葉がなくてもよく話を聞いていくとコロナの影響を受けていることが多い。
 - ・人との関係が希薄になり、孤独感を強めている子が多い。家族との関係が良くない、所持金がないなど問題を抱えている子ほど孤独・孤立も抱えやすい。
 - ・元々抱えている問題や困難が増幅、悪化したケースも多い。有事の際、影響や打撃を受けやすくなってしまふ。

コロナ関連の相談（全国より）

親の仕事がリモートワークになり家で一緒に過ごす時間が増えた、親が失業し暴力が増えた、風俗で働きながら子育てをしているがコロナで客が来なくなり収入が激減、普段受けている支援やサービスが受けられなくなった、コロナで学校が学年閉鎖となり家から出ることを禁止されている、家族と一時的に距離を取りたいと思ってもコロナで行動が制限されたり店が閉まったりするため逃げ場がない、孤独感や不安感が強くなり希死念慮も強くなった。そうした気持ちをなんとかしたいと思ってSNSで繋がった男性と会ってしまう など

全国の相談に対応するために必要なこと

- ・各地域の支援団体との連携
- ・全国で若年女性に対応できる民間団体

・話を聞くだけではなく具体的な支援を必要としているケースには東京からの遠隔支援ができない。
・地域ならではの問題がある
(社会資源やシェルターの有無。気候、地形、交通機関、地域住民との関わり方等暮らしスタイルの違いなど)



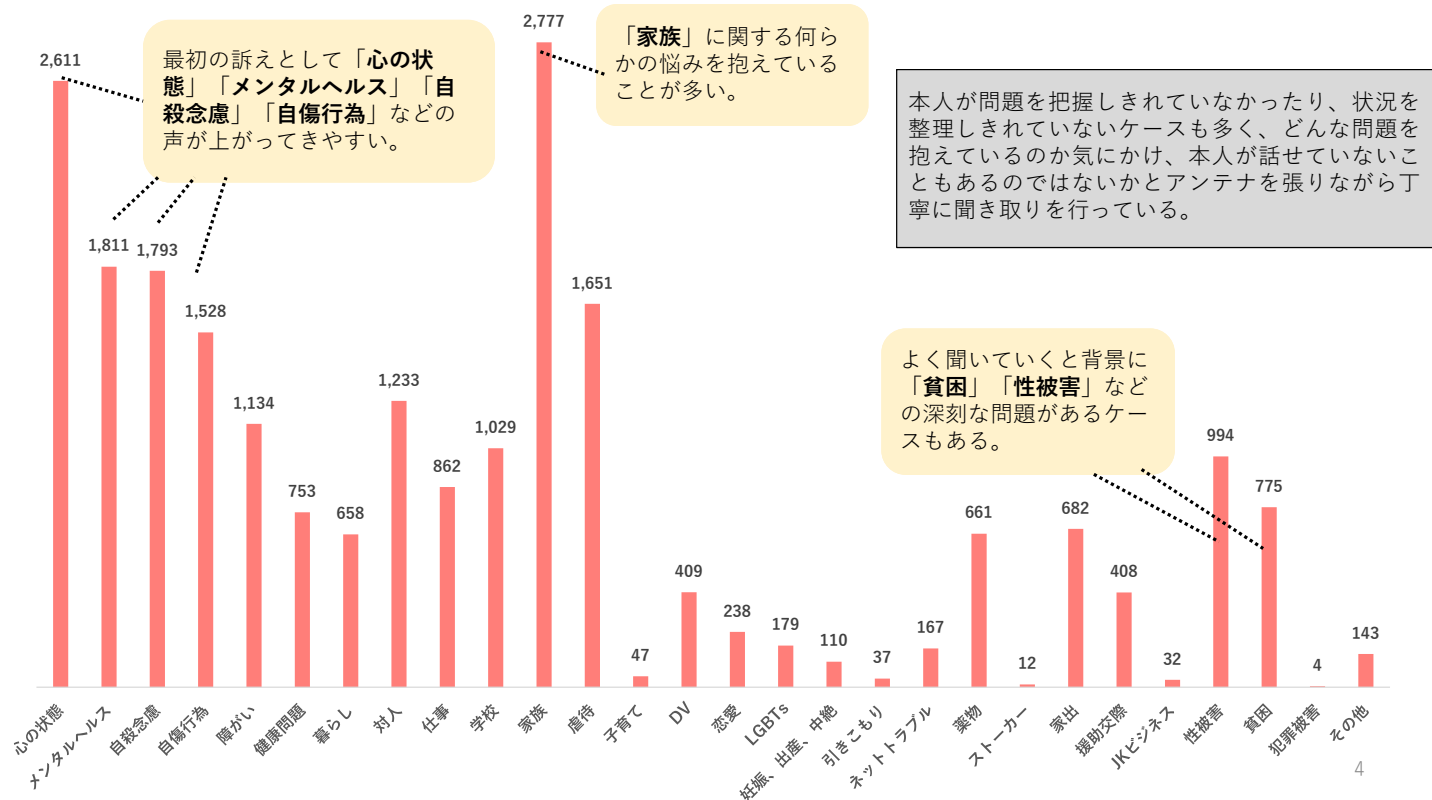
- コロナ禍での支援状況**
- ・かつてのシェルター入所者などコロナに感染または濃厚接触者となり自宅待機している子への物資支援。
 - ・生活困窮している子への物資支援。
 - ・対面で相談できる相談室の運営開始(bond@横浜相談室：2020年10月より)
 - ・感染予防対策がままならない子への対応。自分の抱えている問題が大変なのでそれぞれ(コロナどころ)ではない、セルフネグレクト、希死念慮から感染してもいいと思ってしまふ、友人たちも感染対策を気にしていないとそれに流されてしまうなど。

若年女性が抱えやすい問題と傾向

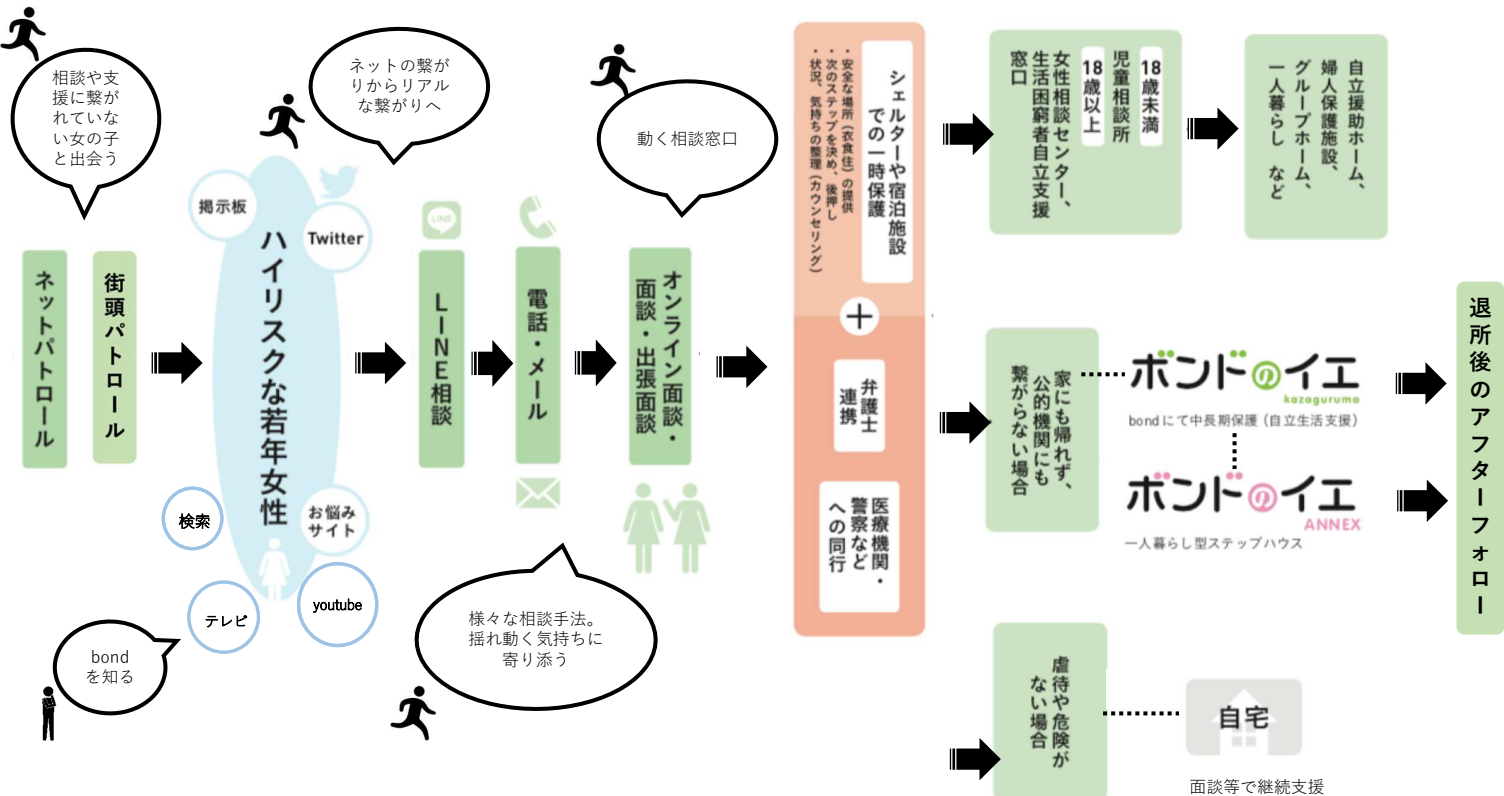
心の状態	孤独感、つらい、苦しい、しんどい、居場所がない、自責感	恋愛	片思い、交際相手、失恋、結婚をめぐる悩み
メンタルヘルス	精神疾患、不眠、摂食障害、フラッシュバック、トラウマ、依存症	LGBTs	レズビアン、バイセクシャル、トランスジェンダー、性自認
自殺念慮	死にたい、消えたい、生きる意味がない・価値がない、自殺企図、未遂	妊娠・出産	妊娠、妊娠の可能性、出産、中絶
自傷行為	リストカット、OD、瀉血、抜毛	引きこもり	外に出られない、人が怖い、就業についての不安
障がい	精神、知的、発達、身体、軽度の障がい	ネットトラブル	SNS、出会い系、リベンジポルノ、ネット上の対人トラブル、犯罪被害、搾取
健康問題	体の病気、性感染症	薬物	処方薬、市販薬、違法薬物、依存
暮らし	暮らす場所がない、追い出されそう、不安定、ネカフェや友人宅を転々と	ストーカー	つきまとい、待ち伏せ、脅し、ネットストーカー
対人	友人、知人、人と関われない、依存	家出	泊め男(女)、ネットカフェ、公園、出会いカフェ、風俗、友人・知人宅
仕事	人間関係、パワハラ、叱責、仕事ができない、仕事が決まらない、転職、退職	援助交際	援助交際、パパ活、ひととき融資
学校	友人関係、いじめ、教員との関係、進路、受験、退学、不登校	JKビジネス	リフレ、コンカフェ、見学店
家族	親、義親、きょうだい、祖父母、親の恋人、親戚、夫、子供	性被害	性的虐待、レイプ、強制わいせつ、セクハラ、痴漢、リベンジポルノ、自撮り被害
虐待	身体的、心理的、性的、ネグレクト、過干渉、両親間のDV	貧困	経済苦、借金、食べるものがない
子育て	つらい、子どもに当たってしまう、孤立した子育て	犯罪被害	トラウマ、生活の変化、裁判起訴
DV	家族感、夫婦間、デートDV、18歳以上の家族からの暴力	その他	非行など

- 複数の問題が複雑に絡み合っていることが多い。
 - 「居場所がない」「とにかく死にたい」「なんかつらい」「全部無理」など曖昧な言葉や断片的な言葉だけで相談が届き、何に困っているかがわかりづらいこともある。
しかし、丁寧に聞き取りをしていくとそうした一言の中に様々な思いや背景があり、複雑な問題を抱えていることもわかってくる。
 - SNS、家出、泊め男を頼ることなども若年女性ならではの特徴。
泊め男とは：SNS上で家出している子や泊まる場所を探している女の子にコメントを送るなど、少女たちと繋がりたい気持ちから何らかのアクションを起こしている男性たちのこと。わいせつ目的だけではなく、孤独から居場所のない少女たちに声をかけていたり、困っている少女を助けたいと正義感から行動しているケースも見られる。
 - 「住む家がない」「DV被害を受けている」などの状況であれば「生活困窮者」「DV被害者」として相談できる窓口や受けられる支援もあるが、若年女性の傾向にあるようにそれらも含めて複雑に絡み合っていたり、漠然としているケースであると制度の狭間に埋もれてしまう。あらゆる相談を受け止め、対応していくことが必要。
 - 18歳未満の子どもたちは児童福祉法によって守られているが、18歳以上の子どもたちに手を差し伸べる法律は少ない。
児相の支援が終わってしまった18歳以上の子が家族からの暴力の相談先に困ることがある。児相の対応の中ではそれらは「虐待」として扱われるが、18歳を超えると同じように相談できるところがなくなってしまう。
そのためBONDプロジェクトでは、年齢に関わらず「10代20代の若年女性」という枠で対応している。
- ➡ 若年女性の支援のためには、こうした相談を受けられるようにしていくことが必要

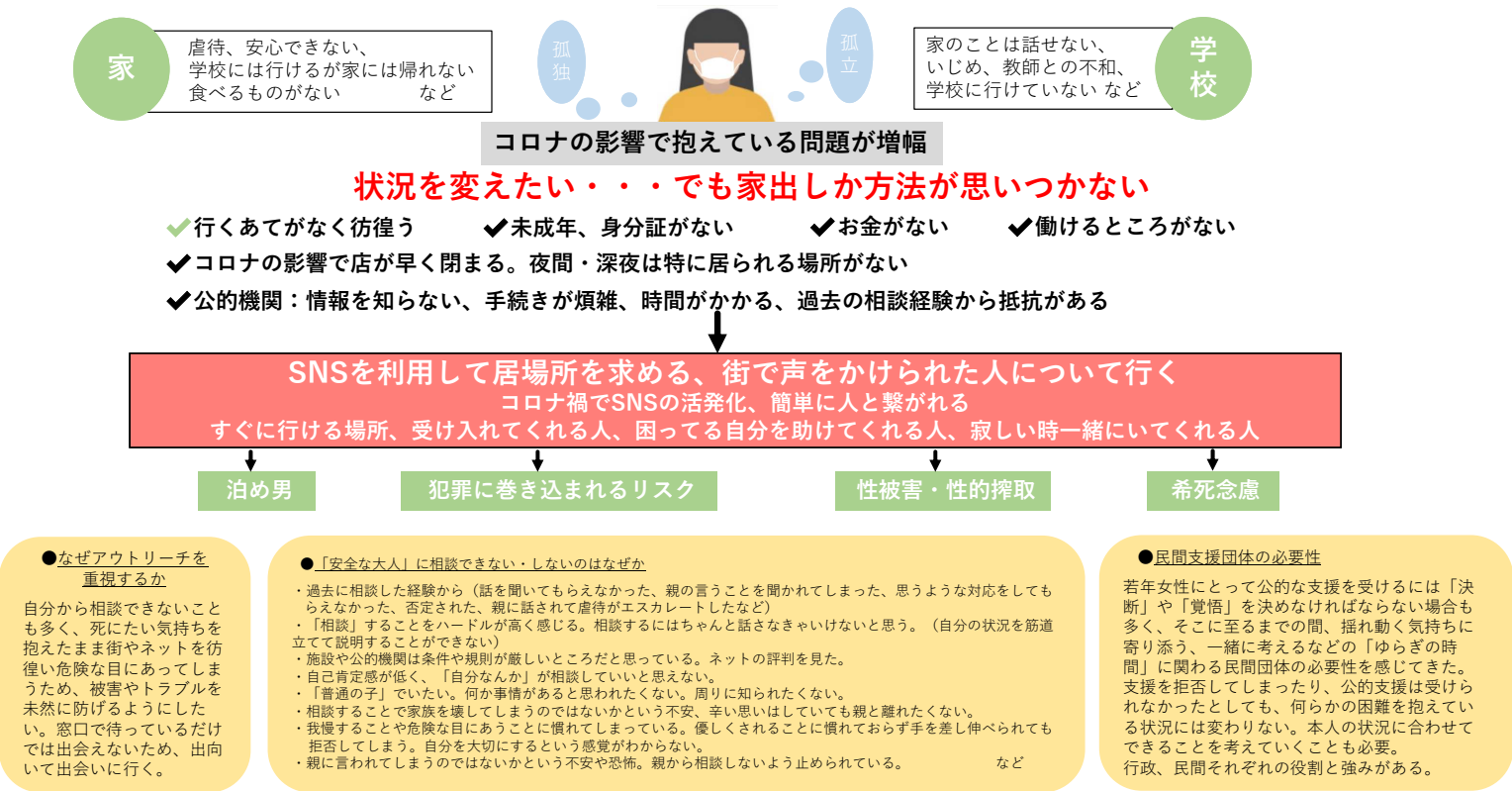
BONDプロジェクトに届いた相談（2021年1月～12月・面談、オンライン面談、電話相談より/複数回答）



アウトリーチから自立支援まで・BONDプロジェクトの長期にわたる包括的支援



困難を抱えた若年女性にどんなことが起きているのか？なぜSNSや見知らぬ人に頼るのか？行き場のない少女たち



ネットパトロールから相談・支援に繋がるために

SNSの現状

共感や承認を求めている声がSNSやネット上には多く見られる。身近な人に悩みや本音を言うことができず、ネット上に居場所を求めている書き込みも多い。SNSが大事な居場所になっている反面、弱みにつけこまれ、犯罪被害やトラブルに巻き込まれてしまうケースは少なくない。生まれた時からインターネットが身近にある世代にとってインターネットはライフラインとなっている。SNSで趣味の仲間と出会うなど、ネット上の出会いが危険なものばかりではないため「SNSの人と会うこと」へのハードルも低くなっている傾向がある。

ハイリスク者の早期発見・早期介入が重要

BONDプロジェクトで行なっているネット上のアウトリーチ

Twitterのパトロール、悩み掲示板での相談先情報提供、google広告の検索キーワード設定等

どのような書き込みに声をかけているのか？

- ・10代~20代、女性と推定できるユーザー
- ・「死にたい」、「家出したい」、「殺してほしい」、「消えたい」といった内容を投稿している。

見つけたハイリスクな書き込みに対してどのような対応をしているのか？

- ・相談先情報を伝えるリプライを送る。相談できる場所があると知ってもらう。
- ・「いいね♡」をつけてBONDプロジェクトの存在を知ってもらう。
- ・危険な書き込みをしている大人側のユーザーを専用フォームなどに通報する。

どのようにして書き込みを見つけるのか？

若年女性がよく使うハッシュタグやキーワードを調査する。時期によって流行的に使われるキーワードがあるなど使われるワードは流動的でもあるためそれらを追っていく。

同世代ならではの感覚やアンテナを活かすため、ネットパトロール、SNS相談は相談者と同世代の女性スタッフが中心となって対応している。共感力、気軽さ、速いレスポンスを重視した対応を行い「相談する」ということのハードルを下げる。同時に相談支援経験の長いスタッフが管理・フォローすることでその後の支援に繋げていく。

ネット上でのアウトリーチからSNS相談に繋がった人数
(SNS相談本格開始の2018年3月~2021年12月)

4,113 人

#ハッシュタグとは SNSの投稿の中で“タグ”として利用され、同じキーワードでの投稿を瞬時に検索できたり、趣味・関心の似たユーザー同士で話題を共有したりすることができるようになる。
#死にたい、#泊めて、#パパ活、#一緒に死にませんか など



家出少女の書き込みに対して即座に大人の男性たちからリプライが集まっている。(Twitterより)

なぜシェルターが必要なのか

- アウトリーチから居場所を必要とする子と繋がった際、受け皿となる拠点が必要になる。
特に夜間、公的機関や店が閉まった後の時間帯の居場所。

想定されるケース：街頭パトロールで声をかけた子がその日に行く場所がない状況である など

- 「家を出たい」「行く場所がない」などの相談が毎日のように届いており、そうした相談に対応していくため。

想定されるケース：すでに家を出てきているが行く宛がない、所持金がもう数千円しかない など

- 物理的な居場所（家や部屋）があるだけではなくスタッフがいるシェルターであること。

BONDプロジェクトのシェルターで行なっていること：

一緒に状況や気持ちを整理してその後の生活を考える。メンタルケアを行う。

家族に教わった経験がないため衛生管理がままならない場合や、セルフネグレクトの傾向があり食事を取らない、栄養バランスの偏りがあるなどのケースも多いため、衣食住の提供のほか、基本的な生活スキルを獲得できるようフォローもしている。

- 居場所を必要としても公的支援に繋がれない、制度にたどり着けない若年女性のための居場所として。
拠点や環境があればトラウマや体調不良から回復していける、生活スキルを身につけていける、自立を目指していける状況にあるの若年女性の回復支援。

BONDプロジェクトのシェルターで対応したケース：

- ・次の支援に繋がらないまま18歳になり児童相談所の支援が終了してしまった。
- ・学校には通えているが虐待家庭にあり居場所のない大学生。
- ・公的施設に入所したが規則や環境に耐えられず退所してしまった。自立は目指したい。

- 退所後、自立後も頼れる場所として

シェルターに来る若年女性のほとんどは頼れる実家がない。

BONDプロジェクトでシェルター退所後に対応したケース

- ・子育てしているが気持ちが追い込まれてしまい、子どもを見てもらいながら自分も少し休みたい。
- ・体調を崩して働けなくなってしまったためしばらくの間休養したい。

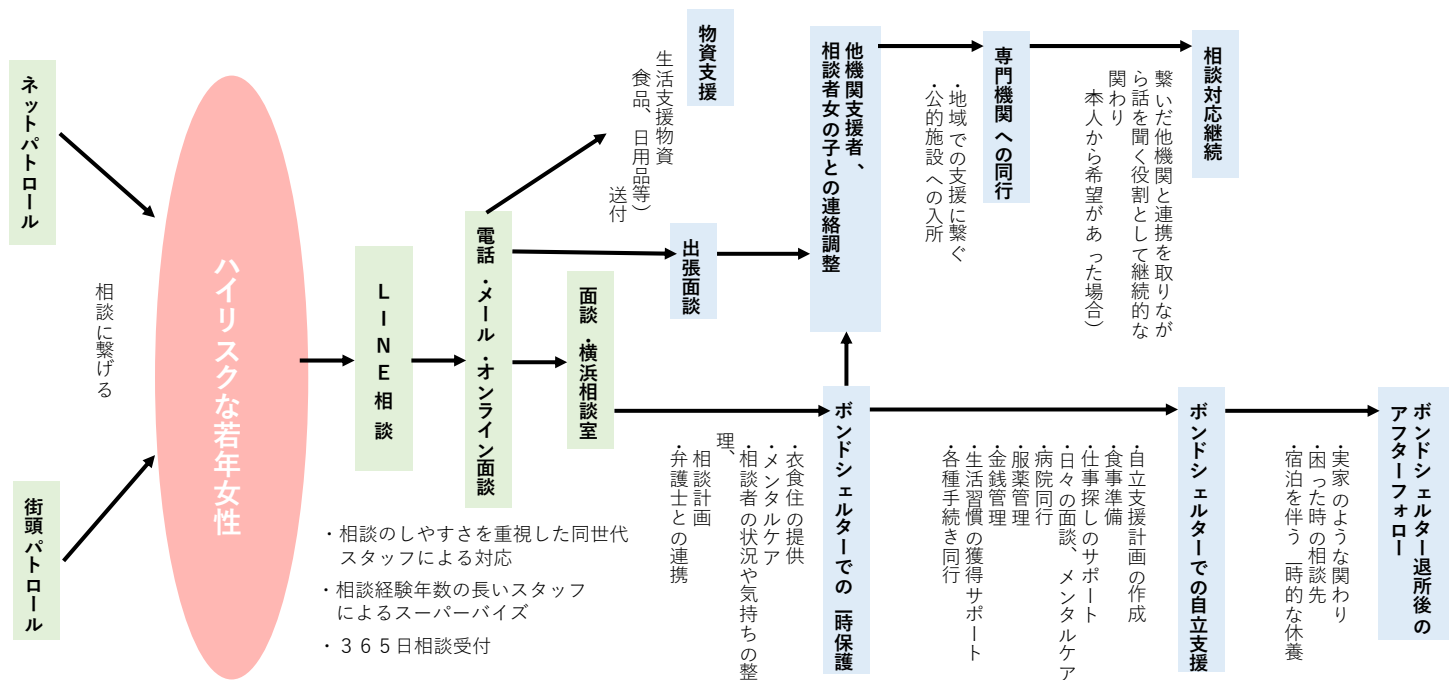
緊急一時
保護の受
け入れ先

中長期の
自立支援

長い目で
見た
回復支援

8

BONDプロジェクトスタッフと女の子の関わり



アウトリーチ

相談対応

居場所での支援・シェルターの運営

回復支援

9

BONDプロジェクトの相談・支援体制（2022年1月現在）

アウトリーチ

- ・街頭パトロール 週3回 夜間2時間程度（渋谷、新宿、池袋、横浜市内）
- ・ネットパトロール 週1回 4時間程度

相談

- ・LINE 週5回（火、日曜除く）10:00～22:00
- ・メール 24時間受付
- ・電話 電話相談事業 週2回（月、土曜）18:00～21:00
その他聞き取り随時
- ・横浜相談室運営 週2回（水、日曜）
面談 13:00～19:00
電話相談 14:00～19:00
- ・面談 出張面談（都内、都外）随時
シェルターでの面談
オンライン面談 週1回（火曜）14:00～17:00

シェルター運営

- ・「ボンドのイエ」緊急一時保護、自立支援対応のシェルター。2拠点。夕方～翌朝にかけてスタッフ滞在。
- ・「ボンドのイエ annex」ステップハウス。シェルターを退所し、1人暮らしの練習ができる。3拠点。

同行支援

福祉事務所、児童相談所、婦人相談、病院、警察、ハローワーク、各種手続きなど

他機関連携

福祉事務所、児童相談所、婦人相談員、女性相談センター、病院（産婦人科、精神科、身体科）、警察、弁護士、ワーカー、保健師、自立援助ホーム、子どもシェルター、就労支援、その他民間支援団体など

BONDプロジェクトのスタッフ体制

相談・支援対応に当たっているスタッフ29名（2022年1月現在） 運営、事務局別途設置

代表、統括

全体的な支援方針の決定

コアメンバー

- 20～30代女性 6名
- ・相談業務全般（LINE相談、メール相談、電話相談、面談、オンライン面談、決められた相談時間外の対応、状況の聞き取りなど積極的介入）
- ・街頭パトロール、街頭アンケート
- ・物資支援
- ・出張面談、同行支援
- ・シェルターでの宿泊業務（緊急一時保護、中長期の自立支援、自立支援計画の作成）
- ・連携先他機関との連絡調整
- ・サポートメンバーのスーパーバイズ（緊急度の判断、他機関連携や情報提供の判断、サポートメンバーの対応への助言）
- ・新人スタッフ研修
- ・スタッフミーティング
- ・相談件数集計、事例まとめ
- ・SNS投稿、配信

サポートメンバー

- ・相談担当（10代～20代女性）17名
相談の「入口」の部分を担当。同世代ならではの共感力、気軽さ、速いレスポンスでハイリスクな若年女性に気づく。具体的な支援は必要としない継続相談の対応。
LINE相談、メール相談、電話相談、相談室での面談、街頭パトロール
- ・ネットパトロール担当（20代女性）2名 専属
- ・宿泊スタッフ（30～40代女性）2名
月数回程度助手的にシェルターでの宿泊業務に関わる。中長期的にシェルターで暮らしていると普段スタッフに話せないことが出てくる時もあるが、「たまに来る人」だからこそ話せることもある。



セミナー事例 @大阪

15歳

- 両親離婚
- 父親と2人暮らし
- 実父からの性的虐待あり、現在はなし
- 日常的に怒鳴られるようになる
- 学校は楽しいが、先生などには話せない
- 児童相談所の存在は知ってはいるが、怖い気持ちが強く、相談には至っていない
- 家に居ることがしんどく、家出したいとも考えている

【課題】

- ・ 本人の意思を確認しながら今後のことを考えていきたいが、警戒心が強いことから、関係性構築までに時間がかかることが考えられる。
- ・ 自身の生活が変わる可能性があることから、なかなか動けない場合も想定される。

16歳

- 母親が教育熱心、ヒステリック
- 孤独感、希死念慮、自傷行為、自殺未遂
- コロナ感染症拡大の影響
 - 学校の登校制限、外出自粛生活
- 家族で過ごす時間も増える
- 突発的に東京へ家出

- 一人暮らしをすることになる
- 母親が毎日のように訪ねる、休日に実家へ戻される度に気持ちが不安定に
- 初めての一人暮らし、コロナ禍での登校制限や外出自粛も重なり、寂しい気持ちが強くなる
- SNSで知り合った人と会うようになる
- 再び突発的に東京へ、性被害にも遭う

【課題】

- ・身近にも気軽に立ち寄れる安全な居場所が必要。

地域支援には繋がらず、東京での支援に繋がったケース

19歳

- 母親のネグレクト、兄からの身体的暴力あり
- 家出を繰り返す
- 希死念慮、過食嘔吐、自傷行為、自殺未遂
- 17歳までの期間、児童相談所や地域支援に繋がることを強く拒否

- 母親に家を追い出され、働いていた風俗の客の家へ
- そこで身体的暴力・性的暴力を受ける
- 風俗の客の家から逃げ、東京へ